



# 大学教育の明日へ

グローバル化が進むなか、大学教育はどうあるべきなのか——。「学びの未来を考える～社会を支えるチカラへ」をテーマにしたシンポジウム（関西学院大学主催、朝日新聞社後援）が10月14日、東京都千代田区で開かれた。2014年に125周年を迎える学院の記念事業。市民ら500人が参加するなか、専門家らが大学における人材育成の道を話し合った。

ジャーナリスト  
津田大介さん



つだ・だいすけ 1973年、東京都生まれ。IT、ネットジャーナリズム、コンテンツビジネス、著作権問題などを取材。早稲田大や東京工業大などで学生を教える。

香山 かつて共有されていた  
「日本は経済大国だ」という前  
提が薄れた今、若い人が自尊感  
情を保つには「第三者からの承  
認」が必要。「うまくいっても

## 若者だけの場ではない 津田さん

パネル討論

関西学院大学社会学部准教授  
今井兼人



基調講演

この十数年、大学生の就職は氷河期が続き、大学も就活中心の営みをしている。1年から4年まで就職活動プログラムが組まれ、産業界も就職活動終了後に語学などの習得を学生に求める。このため、大学での勉強時間を犠牲にすることになる。

大学への就活の圧力が強くなつた背景には、「教育は親の責任」という考え方から、日本の公的な教育予算が低いことがある。産業界も離職の早さや業績不振から、人材育成コストを大学に転嫁。保護者は高い学費への見返りを、文部科学省もグローバル人材育成をそれぞれ大学に求めている。この結果、キャリアに特化した授業を大学が作り、しわ寄せが学生にいく。

教育の出口である産業界は内需依存構造のままだ。円高でも、日本企業の海外製造比率は低下しており、汎用性の低い自社独自のスキル習得を求め、大卒の学生増加に見合う雇用増もない。つまり、産業界がグローバル化せずに、国内向けの仕事をする環境と採用形態を維持しているため、大学側のグローバル化に対応した教育シナリオとの間にミスマッチが起きてしまっている。

どうしたらいいか。

インターネットの発達で、情報を持ってくるのは限られた人という前提は成り立くなっている。その中で、効果的な教育手法として注目されているのが、学生自らが教えあう「アクティブラーニング」という手法だ。講義の様子は自宅でインターネットで視聴し、大学では先生と一緒に活動する反転授業も広がり始めている。

ただ、箱ものがそろっても、学びサポートする人材が足りていない。学生が教える文化を作るためには、最低3年はかかり、こうした文化を継承していくプログラムが必要だ。汎用的なスキルを学ぶカリキュラムとして、特定の企画を達成する過程で何かを学ぶというプロジェクトの取り組みが始まっている。社会人やリタイアした世代が大学で帰つてくれれば、若い人の刺激にもなる。

大学に要求すべき価値を考える材料は様々にある。

世界市民を育む、  
びがいる。

125  
NSEI GAKUIN  
1889-2014

## 関西学院 ミッションステートメント

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、

スクニルモット=“Mastery for Service”

関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は、「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、自らも鍛錬していく開学人のあり方を示しています。

関西学院は2014年に創立125周年を迎えます。



- 神学部
- 文学部
- 社会学部
- 法学部
- 経済学部
- 商学部
- 人間福祉学部
- 国際学部
- 教育学部
- 総合政策学部
- 理工学部

http://www.kwansei.ac.jp/  
関西学院広報室  
〒662-8501  
兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号